

911.3
キ
下

青
木
抄

下

去來抄 下

終行教



去來曰蕉門に千葉不易は句一時流り乃句との案
 是を二川のわけを盡すとも云えを一なり不易哉
 志くはん其立くく流りを志くはん風新を志く
 不易ハ古より直く後より今なるに千歳不易といふ
 流りの一時くの変りてき流りの風を今直くは
 今日此風を覺ふ小用おるをいふ一時流りと云ふは
 去來の事なり

今もあゝ〜
いゝ〜

魯町曰流行の句はいつに去来曰流りの句をたのしむ一つの
物較ありてとやる也形容衣裝器物等にいつもまた時と
乃そやとあることとたると

むすや〜夏よ〜きの暑さうな

此種之〜はりす

あはハ松まてこそ〜すま然書 松下

浦光肥す浦光瘦すもなむ 常矩

或ハよととめあゝいハ秋書の初らみも謡の詞とりなると

物較ありてとあることとたると
人なす 魯町曰むすや〜とたると
去来曰流り之の一事う〜物較ありてとたると
流とはりりあり

魯町曰不易流行其元一なりとをいふ去来曰此事辨〜
〜
坐卧行住屈伸伏仰乃取同一〜
変風乞之姿ハ時に替るといふも昔も有為もいふは
同一人也魯町曰風と変るもなす人ありとをいふ
去来曰本をた〜て末と変る時を或ハ変風と変風

俳諧をふれ或を離れよといふもはなれ

魯町曰基より出るも出さぬもいふらん去来曰基を去る

すゝゝハ解しるかむしあつたに知れる也一いつれ

とあけきおこりすなると先師の風といふも

貞固く松多門も女ともまほひ

蹴わり蓮乃葉もあはく雨といふも素堂

らららき詩う語う又文字の教合るも

散花ふたらら〜わ〜れ〜の夢 幽山

は句を謎なり詠諧歌に謎の神もあまふやをさるるも

詠諧歌体よりハいそよ素〜え〜

魯町曰先師も基よりあま風体もや去来曰奥州行御乃

あまあまのせり御のうちにユマ〜ゆ〜をえ〜り行御の

〜らにも あまむらんや甲の下れきりく須といふ句あり

後よあまの二字と捨らば〜り是のまにあはる異体乃句

あまもろ〜ゆ〜もあま〜此年の冬〜めそ不易流りの

教を説終へる魯町曰不易流りの事を言説りや先師乃

桑明もや去来曰不易流りの事もあま〜ゆる也志〜れもあ

あまの先達をいふ人なり〜長頭丸ら来を〜込る一神

久〜くはり〜 角指や傾けのまふ丑のと〜

を水あけて咲せよ天龍寺といふあま〜た吟〜り

世に人といふを於のそまき物とせしむるはめねしを風と
変するもそのまきしに宗周師一度きうりしありしをそま
破る新風と天下に流りしは作といふは此教ありし
まのりしよりこれる都鄙乃宗匠を言風を用ひ一旦流く
を起せりといふも又も風とまきたるのちかきしを時く変す
つゝなまきしに先師をうめて詭借乃本師と見つけ不易
乃句とまきし風を時く変ある事とまきし流りの句
変ある事とまきし教はし然も先師を曰宗周と
んんがくし詭借しん貞徳の徳と稱するし宗周はは
中興岡山なりといふ

夫竹曰不易の句も當時を師と好むとやと是も又流りの
句といふは也

去来曰蕙門は不易流り此説くあり或は言の一句くをそ
まきし是も流りなりといふは也
教といふもといふは本師一時くは変風とあり也

去来曰詭諧を修めせんと思ひしより時代く乃風
宗匠くの師と能く考ふ盡しし是誠志の時を新古
たのつゝ分取物なり

去来曰詭諧の修り者ハたの好む風は先達乃句は
一すしん尊し學ひしを一句くに不審とせし難と擇ふ

許六曰獲句ハ取合て他す時き句多く出暮るも然らず
初学は常らばをたしつて一功者も及ては取合不取合の
論もそあつて

許六曰獲句ハ題の曲輪を飛出さるはさし一廓のくちには
かふま然也自然曲輪乃中よりハ天然うて希也

去来曰彖句を曲輪の心なり然も然るあり凡そ即興感偶
する物も多しハ心あり然とも常に業に心をこころなく
多くハ古人の糟粕なり千里をかけ出す吟する時き句
た月も然るも一筆類との心初学の本思ふは
去来曰功も然らず及てハ又内外の論はあつて凡そ此

句毎曲輪の心なり平此事を示すハ電は徳利さけて無きり
と云成徳利さけさけりとも出守 今月に皆さるべきと
利もりともいふと引くべきは皆さるたて 動運ともいふ
去来曰池門と蕉門と一葉しよに遠いありと身も由
蕉門を景情ともにも有るよと吟守化流を心中に巧も
と見えたりたると 清遠兼夜さすも然るまをさつて
元日新室ハまきした出舟ハ鴨川や二度の結網ハ船一つ
といふこと 禁烟ハ蓮葉なり 洛陽ハ出舟なり 船
ひし川ハおき事なり 皆是 細工なり ありなり
去来曰蕉門の獲句ハ一字不通乃田丈十歳以下の小兒も時不

よりてよむ句あり却る化門の功者といつれんきそまが
化流きき流る功者ありそ流はき流れよき句まが
しと思えたり

去来曰 詠諧を新意と專ますといふも物本情を遠き
いふまがよあはれ若其事成らばしりふも品ありた
感時花濺涙惜別鳥驚心或き桜花ちとちる人あはれ
あまも人の來ても思ふにくにといふたはひなり感時惜別
大ま人の思ふる是を一首乃眼也

去来曰 詠諧ハ火とも水ぬいひなすと清捕い一歌を迷ひて
雪乃降る目き汗とりきたりといふまもくしり流る
人ありまき火と水とはりそる人の思ふすといふまを
はらうけ故なり雪の目け汗くやしか一句は能ひの
はきまわしむ嘆くも雪ひきしに於鳥返あはれそる水と
たはらひひもむの類也

去来曰 句業小二あり趣向より入るも又詞道具より入る
なり初及奥より入る人もまき此他多句也趣向より入るを
遅吟寡句也さはと業しり能信を論る時を趣向より
入るもよりし詞はまより入るも和歌者流きを嫌ふ
とんえたり 詠諧をあらうらにましり

去来曰 蕉門小同業同竈と云事あり是を前吟の禱形

ふ入る他は此句也たゞとて竿もそくて物もくもく
句を刀の端々降子ふさる或ハ杖、みーくくて地もくもぬ
と吹く、ゆる也同電乃句ハみぬか、さしと見より
生もあ、たんハ又も柄なり

去来曰句に句勢とりま平あり文上文勢語ハ語勢ありの
こ、た、ん、え、う、う、こ、く、小、糖、雪、ふ、も、と、云、句、と、先、師、曰
お、あ、と、と、と、小、ぬ、う、ゆ、ふ、降、る、と、他、は、句、勢、あ、り、と、な、り
去来曰句に姿も云も然ありたんと

妻よ小 稚子お身をかきす海 去来
初をいさつとよよ 稚子のくろたつて海も他もくろくたつて

先師曰去来汝いさる句は姿と云すや同、まも初いつて
等ありとて也、ゆるなり支考ハ風姿と云すも初い
去来曰句に語路とりま然あり句く、まのま也 語路を
盤上と玉のぼるのこく、滞なまをとりとす又喜柳の風に
乱るる、ゆる、優をぬくも、柄も、ろく、ん、溝、川、小、古、泥、の
なる向中りありありく、なる、た、る、ハ、け、る、一、そ、外、甚、中
一句二句ハ曲と云せざるもあ、る、一、ま、と、も、語、路、の、滞、と、云
ま、嫌、ふ、也

先師曰幾句ハ昔より極く替り侍はる附句ハ之変はとて
ま、終、る、む、う、一、ハ、附、物、と、云、す、と、寸、中、以、て、公、附、と、云、す、寸

今も移る筈尔係此位といふ所とすうと
杜年曰いふる我言白の移るといふ事

去来曰支考言あしと書出せり是ともよとりのこと
もいひていふ先師の評とあけてさういふ人化はれ
とあしゆい

赤人乃名そつはうと何事 史邦
去来

先師曰つりといひ白のい実、去年中三十棒
けらけらとるなりと候は候のり交りおれ
白のつも移るといふ句他能あやけその

とてぬとの境をば冷暖自知乃時とてハ惜し
む事ある由此白あり赤人の名もありとす
もも替る事いふなりけりとも能くとも
しりといふより合意なるいとはおつるなり
味乃見しは候一筆はてハぬくことしと

くは極め退るけと打つ
身やうに太刀のさういふ

先師は句と行を教ると右の子まで土を打つ
左の手めて太刀をさういふ事似して語る
一句くは趣のかつるなりと語みありと

看破せしむ一

杜年曰句の位とはいふ事去来曰前句は位を
そ附る事なりたとふま句ありとも位意せしむとの
先師の意の句をあげていふ

よ恋は干菜きうむもくもぬき

馬よおぬ自は内てうひまら

前句を人の妻もあはれ武家町人の下女もあはれ宿屋
回座は下女なりと見を位をきやうも然也

細き目に花をみる人の頬をほく

あはれ色も紅は紅は編ちふ

前句古代り人のありさゆなり

白粉をぬぐはるも下比くうい歌

涙をぬぐはるは神のたまも然

前句のさゆやの女と見ゆ

尼をみるは骨乃きぬく

月影を霞とやんえすうしを

前句いふもて然も然ゆの妻と見ゆ

ふすゆつんて洗ふあはれ

無をみ恋はるるは持せしや

前句所あるうもあはれと見ゆ是をまて代きあはれ

とてしる

杜年曰面叙もて附ると云いへる去来曰くつりひり記句の
附後の字並也おもつけを附せし事止むるははるくは
と事成るに附りしれを面叙もて附るといふ

草菴に志ありて居てハキヤアリ

いのちをまじくを撰集乃何は

初を和哥の真像もあはれと附り

先師曰前を西り能周との境界とらんるる

とれと並にありと附んをまじくをてた西叙もて

附りしをかくとてしるぬいへる西り能周の面叙

年とてなり又人をまじくしるもあはれとて

桑心妙をいへにりしるすう山

内務の路もてしる人を撰を

先師曰いへる面叙もておもつけを人となり面叙の

支考も書きてしる又今に

支考曰附句ハ一句ハ一句也前句附るといへるも

一連誦といへるも其場を人其時節等前後の

見合ありて一句に多ハあま物也

去来曰附句ハ一句ハ千万也故に誦讀変化極れ

支考ハ一句ハ一句といへるも附る場の事なる一附る事

多くなるは相也句を一場の内もいく月も有し

先師曰氣色をいふとくけつても有し一天象地歌人事

草木昆虫鳥獸のありつれを歌容みなくも有也

支考曰附句ハ附多物あり今能雑諧をつまはるとし

先師の句一句もつらさるはなし

去来曰附句ハ附多物あり附句ハ附多物ありハ病なり

今能他者附多事を初人の業の極みおほえそはけり

附多句多し一人も又字はると人乃いふも事を極多

附多句と答はれ却るよく附多句と笑ふやうき

多、安るは各なる事も多し

去来曰附多つけ又公附多し附多し多し附多し多し

附多物なるは情とひくは附人なる前句は川に白ひ

去来曰附多しハいつし附多しハいつし附多しハいつし

去来曰蕉門の附句ハ前句の情を引來ると増ふは前句ハ

是いふは附多しハいつし附多しハいつし附多しハいつし

多し多し多し多し多し多し多し多し多し多し多し

先師曰附多しハいつし附多しハいつし附多しハいつし

多し多し多し多し多し多し多し多し多し多し多し

宇鹿曰先師十七の附多しは略通し傳授し終るは多し

多し多し多し多し多し多し多し多し多し多し多し

とせぬ、附方は是よりまきりしるまきり人の迷ひぬらん、
於ら向て半か、終ふ分十七ヶ条と申す人、
傳更とてなまじりしるまきり大津までついでやむむむむ
路通も、其反言、拾ひとりて人の教るまや許六白けり
祇くひひひひハ千那法師なり

去来曰附句ハ何事なくきりくとすゆるとすりくとす巻を
よむに思業工ま、附句をたむむを告ふ事也

去来曰風ハ千変万化とすりも句体新く濁く押く
慥なる正く厚く困なる和なれ剛なる解なるなり、
速なる如此ハ、鈍く濁ゆる弱く重く薄く軽く

淡く弱く騒く、言まかくのとなひ、但、
句まきり音画あり

支考曰附句ハ句み新言ナリ附る場は新言あり

去来曰古風の句を用ふるにも場よりこり、
あまなはいと古体乃とらみ今や、
先師曰一卷表より各抄を一種あるんハ、

去来曰一卷面をきき、
表より物粒も曲も、
ていさりと骨折ぬや、

退屋いてまきりしるまきり相也、
末まで至ては互に
退屋いてまきりしるまきり相也、

了して其れぬおなりきれと未くまじ吟席いふみありき
好き句出来しんと無理は止るべきわす好き句を思ふはな
とらふ事し

其角曰一卷の好句九句十句首にも一二句好句ありは詩の
能句とせんよれりてくは却る不出来なるも然なりいま
好句をくむくは随分好句を思ふは

云某曰附拍を附する事尚時嫌ひはれどもあつてとん合
一卷の一句二句ありは之風流なるは

浪化曰今能雑踏拍結多を用ゆる事いく去来曰同一くハ
一卷の一二句ありは係一様義の中は待人りり小法門の

徒も門中の翁なり此集撰む時おくりおの句をくまじ
粽造りの句を他して入給つ

去来曰此吟ある時を風あり風を必要す是自然のこころ
先師乞賦よく見ぬ事一風に長くとまある事一は事と
示し終つるたは先師の風なりとも一風になつて変化
をさすは却る先師おろくにたう

杜年曰発句は管息いいうん去来曰發句ハ人のまじりともと
感とるうりさもあつてはさみ次也さもあつては
りき又さ次えさあつてはさみ下也

杜年曰發句と附句の境はつれ去来曰七情万景とつれ

ハ哀なる句あり細くハたよりなれ句ありハ
句あり細くハたよりなれ句ありハ
いと

十巻も小粒ありぬ秋乃風

先師曰は句志をりあり

多しともと兼入ておる余吾の海

先師曰は句細之ありと評し終ひしと也

去来曰熱してさひ終細之志をりの事ハ以心傳心なれ

唯先師の評はあけを教る終も他をたてて明むし

先師述化乃年深川と出給ふと死野坡問曰といふ

やくり今のそく作し傳へ先師曰志をり今乃風

なるそくみ七年もさるそくハ又一変わしむとを利

今年素堂子治の人を傳へて曰蕉翁の遺風天下に

満て漸く変すつふ時いれ吾子らさしと同一

して我と吟舎して一口の新風を真りせんとなり去来答云

先生の言がしけなく悦び傳る予も兼つて思ひなれども

あゝん幸子先生をりしるたてし二二の新風を起さハ

おそくハ一夜天下故人をたてらるせん志れども世波

老の波日くしちかきなり今を風雅を遊ふに思ひいふのも

なすれん唯詩多ねもひ傳るたてし中素堂子も

安永四年乙未三月

井筒屋庄兵衛

皇都書林

橘屋 治兵衛

本來此類



増補書夜重宝記

小本 全一册

茶の煎法... 図式生花... 精進... 牛馬の療治... 種々益疾に用べし

大坂書林

心といはしぬ茶書也へ

柏原屋清右衛門藏板

